

環境と人間Ⅱ

森林・里山と人間

日時：平成23年7月31日（日） 13:00～15:00

講師：只木 良也（名古屋大学名誉教授・国民森林会議会長）

概況



◎森林・里山と人間

1. 森林：世界の中の日本、日本の中の濃尾平野

降水量により植生が決まり、雨が多いと森林が発達する。世界の森林において、降水量から見た森林成立条件を満たす面積は、陸地面積の 1/3 から 1/4 (約 40 億 ha) に減少中である。日本は、多降水・暑夏であり、国土面積の 2/3 を森林が占める森林国であるが、国民一人当たりの森林面積からみると貧林国である。

愛知県は、県土の 4 割の 221 千 ha が森林 (天然林: 73 千 ha、人工林: 141 千 ha、他: 7 千 ha) に覆われている。平野部から標高 300～400m は暖温帯照葉樹林、それ以上は中間温帯落葉樹林が発達している。現状は、復旧・遷移途上の二次林、手入れ不足の人工林が多い。加えて、マツ枯れ、タケ林の勢力拡大などの問題があり、特に近年は、カシノナガキクイムシ被害の拡大が大きな問題となっている。

2. 上流森林の恵み

- ・水：木曾川水系 (水量豊富・良質) ←森林が育む。
- ・木材：木曾ヒノキ (世界一の木材)、尾州檜 (尾張木材集散地)

3. 「自然」を維持するために

自然保護には、遷移を考える必要がある。人手の入った自然には遷移の抑制が必要であり、そっとしておく (保存) だけでは、遷移途中の自然は維持できない (自然保護の手段 (保存、保全、防護、修復、維持) の選別適用)。

4. 里山の保全

森林は自己施肥系(物質循環)であるが、人間は、この森林の自己施肥系に割り込み、落葉を採り、柴を刈ること(収奪)で里山を生んだ。ところが、生態系維持のための材料を絶え間なく収奪された里山の土壌は次第に劣悪化した。昭和 30 年代からは、化学肥料・石油燃料の普及により、里山の収奪は停止し、土地は肥沃化した。しかしながら、人間の無干渉はかえって里山を荒廃させ、同時に存在価値を失った里山は、各種の開発の対象となった。

里山は、なぜ必要か？それは、①環境保全機能論的に、一人十役二十役も果たすこと。②生態系論的に、正常(里山)が異常(都市)を補完すること。③文化論的に、「田＋土＋山」森がコメを育て、コメが森を守ったこと。が大きな理由として挙げられる。里山ブームのなかで、新しい時代の利用法を見つけ、その管理法、社会資本としての位置づけ、里山の都市施設としての位置づけを確立していくことが必要だろう。